

令和 6 年 6 月 1 4 日現在

機関番号：20101

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K18473

研究課題名（和文）診療記録の電子化を科学社会論・社会的に探究する 生政治とIT技術と市民社会

研究課題名（英文）On Biopolitics, IT and Civil Society: How systems for electronic health/patient records have been, and will be, developing and utilized in Japan

研究代表者

佐々木 香織（Sasaki, Kaori）

札幌医科大学・医療人育成センター・教授

研究者番号：40758314

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,400,000 円

研究成果の概要（和文）：研究期間を通じ、電子化された診療記録や身体・医療データを企業や医療研究者が利活用していく様相や、その様な利活用を進めるための社会・制度の基盤整備のあり方を調査した。そのような利活用は、生政治を含めた生権力の行使（の可能性）がどの様に内在し、実際にどの様に展開していこうとしたのかを論じた。そのうえで身体・健康情報を計測する機器とそれが算出するデータとそのデータを利活用して生政治が展開される過程を把握するために、アクターネットワーク理論が有用であり、その発展の可能性も議論した。また医療・身体情報の利活用にかかる市民社会との信頼について、英国との比較検証から考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療・身体情報の利活用を生政治を含めた生権力の行使の文脈に付置して議論する本研究の試みは、日本では稀で世界でも数が少ない。また医療・身体情報をアクターネットワーク理論の視座から捉える試みも同様である。したがって、本研究は学術の新しい方向性を開拓する萌芽となる。医療情報の二次利用には、個人情報の無償提供から利用に至るまで、個人の権利にまつわる課題があり、その成果（物）が商品化される場合には、それに伴う課題も生ずる。また生政治や生権力の行使が展開する医療・身体情報の利活用は、市民社会の信頼を伴わないものは多様な問題を孕みうる。これら課題を本研究が明らかにしたことは、政策論議に貢献するだろう。

研究成果の概要（英文）：The study examined the ways in which policies and social system had developed in order to facilitate the secondary use of e-health data for research in Japan. It also explored how practices of biopower (which includes biopolitics) has been inscribed in the secondary use of e-health data, and the ways in which biopower have evolved through such use of e-health data. With these understandings, this research project has discussed significance of Actor-Network Theory in terms of describing and understanding evolving processes of practices of biopower; it considered how a personal device and/or application (it examines personal health status, displays data and aggregates such data for big data analysis) could be articulated and re-articulated with a human subject with reference to biopower. Furthermore, this research had explored how gaining public trust in such usage would rather reflect in the development of secondary use of e-health data by comparing the UK with its counterparts.

研究分野：科学技術社会論・医療社会学

キーワード：医療情報 生政治（バイオポリティクス） ジェンダー アクターネットワーク理論（ANT） 監視 ビッグデータ 個人情報保護 市民

## 1. 研究開始当初の背景

医療・身体情報の利活用は、2010年代に急速に世界中に広がっていった。そのため日本においても「バスに乗り遅れるな」という空気が高まっており、大規模な利活用が2010年代後半に目指されていた。例えば2018年5月に医療情報の利活用を発展させていくために、「次世代医療基盤法」とよばれる社会的そして制度的な基盤を整備する法律が施行された。この法律は日本全国の医療事業者や自治体が保有する医療・身体情報を、「認定事業者」と呼ばれる団体に対して提供し、認定事業者を通じて研究者が医療データを二次利用ができるようにする。ただし基本的に匿名加工医療情報に当時は限られていたが、法律である。

ここで市民の権利が問われることになった。第一に、自身の病院のカルテや自治体の健康診断の情報を、認定事業者に提供されるか否かについては、オプトアウトという制度を採用していることに起因する課題である。このオプトアウトとは、個人が積極的に提供を書面にて否認しなければ、当該の自治体や病院の判断で認定事業者への医療・身体情報の提供が可能となっている。そのため市民社会における医療情報利活用に関する「信頼」が、この政策の成否にかかることが予測される。なぜなら平成期において実施された「住基ネット」や「マイナンバーカード」のが導入され普及を目指した政策がとられたが、個人情報の保護を懸念する市民も多く、2010年代末において成功したとは言い難い経緯がある。したがって医療情報の二次利用・利活用についても、個人情報の保護にかかる市民社会の「信頼」は大きな課題の一つとなりえることが予測された。第二に、データを利活用することによって、どのような公衆衛生をはじめとした医療政策が展開するのか、そこにどのような生政治を含めた生権力の行使が内包しているか、更には、そこに内包する生政治を含めた生権力の行使は何を意図しているのか、と言った点が明らかではないという課題である。コロナ禍となってからは自明となったように、公衆衛生に代表される医療政策に伴う生政治を含めた生権力の行使とは、個人の自由選択をはじめとした個人の権利を抑制することが可能である。したがって、大規模データを用いた公衆衛生と医療政策に内在する生政治を含めた生権力の行使（の可能性）を明らかにすることは、今後の医療情報の利活用と生政治を含めた生権力のあり方を検討するために重要であると考えられた。

また、科学技術社会論で発展してきたアクターネットワーク理論は、日本では未だ十分にその価値が認識されていなかったり、その応用の方向性が定まっていなかったりしていた。アクターネットワーク理論とは、モノとヒトの連関性を、従来のヒトがモノを支配する・使用するという主客の関係性で分析・記述する視座とは別の切り口で、それを分析・記述していこうという理論もしくは研究の身構えである。つまり本研究は、人間と医療・身体・健康データを収集する様々なデバイス・機器、それらの情報を電子カルテなど記載・記録するモノ、更にそれらの情報自体と、それらを取り巻く環境とが、どのように連関・ネットワークを組み、また組み直していくかの過程を視野に入れる。つまり医療・身体情報とそれを測定する機器を用いた生政治の展開について、アクターネットワーク理論の視座を応用することで、アクターネットワーク理論の日本における発展・普及の可能性と、医療・身体情報の利活用に関する科学技術社会論の枠組みからの研究領域の発展・開拓を試みようと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は医療・身体情報の電子化と、それに伴い発展しつつある医療・身体情報の二次利用・利活用（例えば、ビッグデータ分析）に関して、以下の4点から探究することである。

第一に、そのような二次利用・利活用は、政策的にどのように発展しようとしているのかを調べ、更には、どのように発展するべきかを展望・議論することである。

第二に、そのような二次利用・利活用に対する市民社会の「信頼」とは何か、またどのように市民社会における「信頼」は形成されるのかを検討することである。

第三に、そのような二次利用・利活用は、どのような生政治を含めた生権力を行使する意図が潜在し、実際にどのような生政治を含めた生権力の行使が展開しようのかを議論・検証することである。

第四に、そのような二次利用・利活用、並びにそれを通じて展開する生政治を含めた生権力の行使に関する探究において、アクターネットワーク理論を応用することで、どのように医療・身体情報を集積するための機器をはじめとしたモノとヒトの関係性を詳らかにできるかを、議論することである。

## 3. 研究の方法

本研究では、以下の4点の方法を組み合わせ、上記の研究の目的の達成を試みた。

第一に、医療・身体情報の利活用・二次利用に関する基盤を整備する途上にある日本の状況について、関連する資料や文献の調査を実施した。その上で比較検証対象として、そのような基盤の整備が完了しつつある英国のイングランドとスコットランドの状況に関して、同様の調査を実施した。

第二に、医療・身体情報を地域ネットワーク化したり、集積したり、産業イノベーションと連携してその利活用・二次利用を発展的に展開させたりしている地域に対して、そのステークホ

ルダーへ聞き取り（ウェブを通じるものも含め）調査を行ったり、現地で視察や参与観察を行ったりした。

第三に生政治の理論、アクターネットワーク理論、そして個人情報やモノを提供・交換することをはじめとした医療・身体情報の政策的発展に関連する社会学理論の文献調査を実施した。その調査においては、これらの理論的枠組みの社会的な意義を、メタ認知できるように努めた。次に医療・身体情報の二次利用・利活用を、それらの理論を用いて分析する道筋を考案したり、議論したりした。

第四に市民社会と信頼という観点から、医療・身体情報の利活用・二次利用に関する基盤の整備を完了しつつある英国のイングランドとスコットランドが、どの様にして市民の信頼を勝ち得ていったのかの文献調査を行った。また日本で医療・身体情報の利活用・二次利用を発展的に展開させている地域における市民参加型のイベントに参与観察を実施した。

#### 4．研究成果

上述した4つの研究目的に沿って、以下の4方向で研究成果を示す。

##### （１）日本における医療・身体情報の二次利用・利活用の政策的な発展

日本では医療情報・身体情報の二次利用が政策的に発展してきている。国民全体に波及する政策としては「次世代医療基盤法」が挙げられる。そこで本制度について理解を深め、そこに内包される医療・身体情報の「資源化」の課題について考察した。なぜなら医療・身体情報が個々人の健康管理に用いられる一次利用においては、医師と患者もしくは市民ユーザーとサービス提供者の間では、無料で行われたデータの交換が、二次的な目的に利用される場合においては、データ分析等にもとづいて何らかのサービスや物品が生まれ、それが市場で貨幣を介して交換されることがありうるからである。すなわち無料で提供されたデータ分析等にもとづいた何らかの「商品化」する可能性があることが、殆ど考慮されずに政策的に進んでいる状況にあるのだ。

この点は市民社会に少なからず影響を及ぼすと考えられる。なぜなら以下の3点の場合と類比的であるからである。性行為が無料で交換される場合と、売買・買春によって売買される場合とでは、後者は性が資源化・商品化すること、臓器が無料で提供されて移植が行われる場合と、臓器が売買されて移植が行われる場合とでは、後者は臓器が資源化・商品化すること、女性が自然に妊娠して出産する場合と、対価をもらった代理母として他者の精子（と卵子）を用いて妊娠から出産する場合とでは、女性の生殖能力が資源化・商品化すること。すなわち、医療・身体情報が資源化・商品化する可能性を秘めている。ここで類比的とした上述の3点は、非合法的ながら実際に資源化・商品化がなされており、社会的にインパクトがあるとして、様々に議論されている。そこで医療情報・身体情報が資源化・商品化することの意味を、丁寧に検討する必要があるという社会的な課題を提示した。

##### 主な関連業績

- Kaori Sasaki, 'Japanese Elaboration of the Official Program for Secondary Use of Electronic Health Records', "East Asia in the Digital Age: Digital Transformation in Technological, Economic and Social Perspective", 2021年9月24日
- 「診療記録の資源化 医療情報の電子化と次世代基盤法」『科学技術社会論研究』2019年17巻 pp. 140-155
- 「集積された電子診療情報の利活用を促進する政策に伴う課題 次世代医療基盤法が描く未来への社会学・生命倫理的考察」, 『日本生命倫理学会 第三十回年次大会』 2018年12月8日

##### （２）医療・身体情報の二次利用・利活用における市民社会の信頼について

医療・身体情報は無償で提供され、それらの情報が電子化されるのに伴って、二次利用・利活用される範囲が大幅に拡大するようになった。つまり研究目的に使用するだけでなく、商品開発に利用したり、ビッグデータ分析や予測結果の提供をサービスとして展開したり、Amazon や Facebook の閲覧や購買の記録・ログと同様に、企業によって多様な利活用をされるようになってきている。そのため情報提供の仕組みと情報の利活用のあり方において、市民社会の「信頼」が重要となってくる。なぜなら医療や健康に関する個人情報の漏洩リスクに対する懸念があるからである。またビッグデータ分析や機械学習やAIを用いて、何を市民社会に対して還元するのか、市民や市民社会の健康に関して、何をどの様に統治するのかという点において、人びとの期待と不安を掻き立てるからである。

国全体レベルで考えると、個々人の診療情報などの二次利用・利活用を安全に実施できる制度を整備した「次世代医療基盤法」がある。その法の下では、医療情報の提供には、オ

プトアウトと呼ばれる同意を要件とし、オプトアウトの実施に際しては「丁寧に」行うことが政策的に求められている。つまり個人の医療情報は、個人が積極的に書面で否認しない限り、「認定事業者」に医療機関や自治体の判断で提供することが可能となる。他方で多くの医療機関や自治体は「認定事業者」に対して提供を行ってはいない。その状況は、多文に医療機関や自治体にとって「丁寧に」オプトアウトを行うことの意味が分かりにくいことに起因していると考えられている。また医療機関や自治体も、認定事業者に自らの判断で提供することで患者からの「信頼」を失うかもしれないという懸念から、提供を躊躇しているとも言われている。他方で医療・身体情報の利活用の実態については、市民社会からはブラックボックスに見えるため、実際に何を目的として、どのようなことを行うのかが不明となっており、市民社会において「期待」の醸成も難しく、且つ「不安」も払拭できず、市民からの「信頼」を勝ち得るには困難な制度設計であることも否めないと考えられる。

これらの点を考慮すべく、比較対象として英国の事例を研究した。英国はイングランドでは、医療情報の利活用に関する政策（care dot data）が市民から不信を招き、2010年代の前半に、政策実行の途中で頓挫してしまった。その結果、市民への「信頼」を重要な課題と位置付けた政策が新たに展開し、昨今は医療情報の利活用・二次利用の制度の整備が完了しつつある。スコットランドでは、2010年代の前半から市民からの信頼を配慮し、データ二次利用の過程にかかる透明性と説明責任、そして市民の参画と監視を可能とする制度を設計し、市民からの信頼を得て発展を遂げている。したがって、日本における次世代医療基盤法の下に行われている制度の設計は、イングランドの新しい政策やスコットランドの政策を参考に、市民の信頼を考慮していく方が賢明であると結論付けられるだろう。

他方で、日本のある地方においては、医療・身体情報をビッグデータ分析したり、産業イノベーションと連携して医療・身体情報の利活用・二次利用を用いて更なる商品へと発展させたりしている事例がある。そこでは様々な医療データ利活用が実践され、それらの分析結果などを活用して新たなデバイスや物品も開発されていたが、市民との対話や交流を非常に重要視しており、その様なイベントも数多く提供されていた。その結果としてだろうか。市民の理解も一定水準に達していることが、現地調査や参与観察から推察できた。更には自治体が「丁寧なオプトアウト」も実践した上で、例えば、市民への公聴会・意見交換会を全ての地区で行い、更に告知を各所で行う。自治体が認定事業者に医療データを提供するという事も実践していた。更に利活用・二次利用の目的も、かなり明確にして広報されており、且つ研究成果やイノベーションの商品も市民に対して積極的に広報を実践していた。つまり医療情報の二次利用・利活用がブラックボックス化に陥らないよう努めていた。そのため一定の「信頼」が醸成していた事例と判断された。この事例については、地域レベルでその地区の実情に即して対応をしたこと、更にプロジェクトの責任者たちが市民参加型の実践を模索していた点が、この成果に寄与している可能性があると思われる。

### 主な関連業績

- ・ 佐々木香織「第4章：デジタル化と社会防衛：医療・健康・身体情報の利活用と生政治、規律権力、そしてジェンダー・ポリティクス」『未来社会を哲学する 第8巻 社会防衛と自由の哲学』美馬達哉編、丸善出版 2024年6月発刊予定
- ・ 佐々木 香織，木村映善，伊藤伸介「Scottish Safe HavenにおけるTREとFive Safe Modelから学ぶ 改正次世代医療基盤法に基づく「仮名加工医療情報」の利活用に向けて」第43回医療情報学連合大会（第24回日本医療情報学会学術大会）
- ・ 佐々木香織「医療情報のネットワーク化・共有とビッグデータ分析やAI学習といった利活用に伴う倫理的配慮の模索過程：自治体の事例から」『第34回日本生命倫理学会年次大会』2022年11月19日佐々木香織
- ・ 佐々木香織「e-health, big-data時代の生政治—Big Brother イメージの超克」『立命館生存学研究』7 13-17, 2023年
- ・ 佐々木香織，木村映善，大寺祥佑「より包括的で正確な医療統計を可能とする社会・制度基盤に向けた一考察 イギリスのEnglandにおける医療情報二次利用に関する調査・事例研究から」『日本統計学会誌』50(1) 81-108 2020年10月

### （3）医療・身体情報の二次利用・利活用に潜在する生政治と生権力とそれらの展開

公衆衛生をはじめとした人口に対する健康・医療政策には、主にM. フーコーやG. アガンベンやN. ローズが論じてきた「生政治」を含めた「生権力」の行使が内包する可能性が高い。医療情報の二次利用・利活用の研究にしろ、身体・健康データを個人から採取するデバイスにしろ、データ分析の結果や予測を通じて、人びとを統治していくものである。つまりデータの二次利用・利活用には、生政治を含めた生権力の行使（の可能性）が潜在し、それが様々な展開していくのだ。しかし、これらの生政治を含めた生権力の行使に関する理論にしろ、それらに関する実証研究にしろ、昨今の電子化された医療・身体情報の二次利用・利活用の発展に関して探究する先行研究は乏しいと言って過言ではないだろう。

その状況に鑑み、以下の3点を研究成果として論じた。生政治を含めた生権力の行使を通じた人民の統治とは何か、地方の事例や次世代医療基盤法などを例として、医療情報の二次利用・利活用を通じて、生政治を含めた生権力の行使がどの様に日本において展開しうるか、フェムテックと呼ばれるデバイス（例えば、月経周期管理アプリ）は、身体情報の二次利用・利活用をした健康サービスを提供するが、そのサービスを通じて、どの様に生政治を含めた生権力の行使を、民間ビジネスとして、どの様な発展を遂げていこうとするのか。なお3点目は、ジェンダーと関連深いことから、ジェンダーと生政治の関連性も議論に含めて今後のフェムテックを通じたデータの利活用と日本の政策を展望した。

#### 主な関連業績

- Kaori Sasaki : Official promotion of FemTech in Japan---how have biopolitics and gender-politics being (re-)articulated through it? ' *Social Studies of Science Studies @ Honolulu* 2023 年 11 月 8 日
- 佐々木香織「フェムテックの生政治とジェンダーポリティクス」『現代思想』51(6) 140-151 2023 年
- 佐々木香織「電子医療情報活用に伴う生政治の展開と課題」『Precision Medicine』4(3) 69-73 2021 年

#### (4) 医療・身体情報の利活用を通じた生政治の展開を記述するためのアクターネットワーク理論の可能性

医療情報・身体情報を利活用や二次利用する際に、自らが自身の身体の状態を測定してデバイスに記録するということが求められることがある。そのログ（記録）が、多くユーザーのデータと共にビッグデータ解析され、健康状態や身体状況の予測を個々人にフィードバックしていく形となる。具体例としては、以下の2例が挙げられる。一つは本研究が参与観察を行った、ある地方における医療データの利活用と健康デバイスの開発を連携させて発展させていくものである。その上で開発したデバイスを市民に使用してもらい、そのデバイスから送られてくるデータによって市民の健康状況を測定・記録するだけでなく、それらのビッグデータ分析などを通じて、個々人にフィードバックを行い、市民の健康改善に役立てようという事業である。他方はフェムテックと呼ばれる、月経周期管理アプリである。このアプリも個々人が送る月経、性交、避妊、基礎体温、体調などのデータにより健康状態を記録するだけでなく、ユーザーのデータを集積したビッグデータ分析等により、月経日や体調や性交の安全日や妊娠可能性の高い日の予測を行い、体調と性生活を自らが管理するのに役立てようとする民間サービスである。

このようなデバイスとデータを用いた医療情報の利活用と自らの自己管理の状況においては、いわゆる近代的な自己が新たな発展を遂げる可能性を秘めている。なぜなら当該のデバイスは常に自分の健康状態を記録や参照する、ある種の自分自身の一部となるだけでなく、デバイスが提供するビッグデータ分析などの予測結果から、デバイスが提案する健康管理に従うことが期待されている。しかし自分自身の健康状態の数値に対しても、デバイスが提供する予測や提案に対しても、多くの個人は自己解釈をし、どの様な健康管理を行うかを考えて、自らが折衷案を生み出すといった自己管理を行うことが多い。したがって、自己とデバイスが独立し、自己がデバイスを利用し制御したり、デバイスの予測や提案を素直に自己に従ったりするという解釈での分析は難しい。自己とデバイスが双方に関連していると捉えた視座の方が、このようなデバイスを用いた身体情報の利活用を通じた生政治を含めた生権力の行使と展開を丁寧に分析や記述できると考えられる。そしてこれこそがアクターネットワーク理論の醍醐味である。つまりアクターネットワーク理論は、このようなデバイスの利用に伴う医療・健康情報の利活用とそこに伴う生政治を含めた生権力の行使の展開について、丁寧な分析と記述に相応しい手法であることを、本研究は明らかにした。

#### 主な関連業績

- 佐々木香織「第4章：デジタル化と社会防衛：医療・健康・身体情報の利活用と生政治、規律権力、そしてジェンダー・ポリティクス」『未来社会を哲学する 第8巻 社会防衛と自由の哲学』美馬達哉編、丸善出版 2024 年 6 月発刊予定
- 佐々木香織「e-health, big-data 時代の生政治—Big Brother イメージの超克」『立命館生存学研究』7 13-17 2023 年
- 佐々木香織「医療情報の電子化・ネットワーク化に伴う医療・看護・介護の変化 生政治・「剥き出しの生」と健康にまつわる情報管理」『日本保健医療社会学会』2022 年 5 月 29 日

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 佐々木香織	4. 巻 51(6)
2. 論文標題 フェムテックの生政治とジェンダーポリティクス	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 140, 151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木香織	4. 巻 3468
2. 論文標題 書評「感染症社会－アフターコロナの生政治」を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 1,2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木香織	4. 巻 4(3)
2. 論文標題 電子医療情報活用に伴う生政治の展開と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Precision Medicine	6. 最初と最後の頁 69-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木香織、木村映善、大寺祥佑	4. 巻 50
2. 論文標題 より包括的で正確な医療統計を可能とする社会・制度基盤に向けた一考察 イギリスのEnglandにおける医療情報二次利用に関する調査・事例研究から On Establishment of an Institutional System for More Comprehensive and Accurate Medical Statistics: Learning from the English Expertise and Experience	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本統計学会誌	6. 最初と最後の頁 81-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐々木香織 , 木村映善 , 大寺祥佑	4. 巻 39
2. 論文標題 イングランドにおける医療情報の二次利用の制度、特に市民からの信頼再建を試みる社会的なシステム構築から日本の制度基盤を展望する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JC Medical Informatics	6. 最初と最後の頁 594-597
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木香織	4. 巻 17
2. 論文標題 診療記録の資源化 医療情報の電子化と次世代基盤法	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 科学技術社会論研究	6. 最初と最後の頁 140 155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木香織	4. 巻 7
2. 論文標題 e-health, big-data時代の生政治—Big Brother イメージの超克	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館生存学研究	6. 最初と最後の頁 13-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 佐々木香織
2. 発表標題 医療情報のネットワーク化・共有とビッグデータ分析やAI学習といった利活用に伴う倫理的配慮の模索過程：自治体の事例から
3. 学会等名 第34回日本生命倫理学会年次大会
4. 発表年 2022年

1．発表者名 佐々木香織
2．発表標題 e-Health, big-data時代の生政治　Big-Brotherイメージの超克
3．学会等名 シン公衆衛生？ 人間の健康増進を超えて　立命館大学ミニシンポ（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 佐々木香織
2．発表標題 医療情報の電子化・ネットワーク化に伴う医療・看護・介護の変化　生政治・「剥き出しの生」と健康にまつわる情報管理
3．学会等名 日本保健医療社会学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 佐々木香織
2．発表標題 社会政策としての医療情報の利活用：近代社会・市民社会の成立と並走する専門家と官僚への信頼を起点に
3．学会等名 R3年DX推進事業タスクフォース2「データ利活用と個人情報保護法のあり方」（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Kaori Sasaki
2．発表標題 Japanese Elaboration of the Official Program for Secondary Use of Electronic Health Records
3．学会等名 East Asia in the Digital Age: Digital Transformation in Technological, Economic and Social Perspective（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年



1．発表者名 佐々木香織
2．発表標題 医療情報の二次利用の制度を考える－イギリスの例を参照して
3．学会等名 LINC WG00 TF11勉強会 WG00-tf11 匿名加工医療情報や大規模医療データの利活用（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Kaori Sasaki
2．発表標題 Japanese policies to establish two types of electronic healthcare record networks: Healthcare policy makers and administrators' expectation for biopolitical control over the population health
3．学会等名 Annual Meeting of the Technology/STS Section, VFJF(Vereinigung für Sozialwissenschaftliche Japanforschung)（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 佐々木香織，木村映善，大寺祥佑
2．発表標題 イングランドにおける医療情報の二次利用の制度やシステム構築から日本の制度基盤を展望する - 社会的な基盤を見据えて -
3．学会等名 第20回日本医療情報学会学術大会（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 佐々木香織
2．発表標題 集積された電子診療情報の利活用を促進する政策に伴う課題 次世代医療基盤法が描く未来への社会学・生命倫理的考察
3．学会等名 日本生命倫理学会30回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 佐々木香織
2．発表標題 「中動態の世界」を考える
3．学会等名 ブシコ・ナウティカの会（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Kaori Sasaki
2．発表標題 Official promotion of FemTech in Japan---how have biopolitics and gender-politics being (re-)articulated through it
3．学会等名 ' Social Studies of Science Studies @ Honolulu
4．発表年 2023年

1．発表者名 佐々木 香織, 木村映善, 伊藤伸介
2．発表標題 Scottish Safe HavenにおけるTREとFive Safe Model から学ぶ 改正次世代医療基盤法に基づく「仮名加工医療情報」の利活用に向けて
3．学会等名 第43回医療情報学連合大会（第24回日本医療情報学会学術大会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 佐々木香織
2．発表標題 フェムテックの生政治とジェンダーポリティクス
3．学会等名 第4回社会臨床研究会
4．発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1．著者名 佐々木香織（美馬達哉編）	4．発行年 2024年
2．出版社 丸善	5．総ページ数 32
3．書名 未来社会を哲学する第8巻 社会防衛と自由の哲学第、4章デジタル化と社会防衛：医療・健康・身体情報の利活用と生政治、規律権力、そしてジェンダー・ポリティクス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------